

Learning Learning

JALT Learner Development N-SIG Forum vol.3. no.2. October 1996

This issue of *Learning Learning* is of transitional nature. Sumiko Taniguchi, who will be a co-editor starting with the next issue, arranged and edited the Tokyo Spring Conference reports. Steve Cornwell, the other incoming co-editor, contributed with his extremely efficient copy editing skill. The Action Workshop reports are a fruit of collaborative editing over e-mail by Andy Barfield, Cheiron McMahon, Richard Smith and Naoko Aoki. Through this process we learned that doing the volunteer work for the Learner Development N-SIG is part of the process of our own development. This awareness might have led Andy, as joint recording secretary, to write the revolutionary AGM agenda for JALT 96 with Hiroyuki Izawa, the other joint recording secretary. It is also reflected in our decision to open up *Learning Learning* to information and discussion on organizational matters. We have also become more conscious of ourselves as L2 users and issues in bilingualism. In the process of the editorial discussion, Andy, Richard, Cheiron and Steve started writing e-mail messages in their L2 to join Japanese speaking committee members who had been doing so for a while. Some of these L2 e-mail messages have been included in this issue together with JALT 96 related announcements and committee members' reports written by L2 users. There is also a new column, Teachers as Learners, in this issue which exclusively focuses on our learning to replace *Learner to Learner*. We hope you enjoy this issue, and ones to be put together by Sumiko and Steve in the future with column editors they are planning to have.

On behalf of everyone involved in the creation of this issue,
Naoko Aoki and Richard Smith

『学習の学習』は変化の時を迎えました。この号では、次号から編集係となる谷口すみ子が、JALT東京支部春季大会の報告をまとめて編集し、同じく次号からの編集係、スティーブ・コーンウェルが原稿の最終編集に彼の専門的技術で貢献しました。アクション・ワークショップ報告は、アンディ・バーフィールド、カイロン・マクマヒル、リチャード・スミス、青木直子がe-mailを通じて、共同で編集したものです。この作業を通して、私たちは学習者ディベロプメント研究部会でのボランティア活動が、私たち自身の成長の過程の一部であることを学びました。アンディが書記として、もう一人の書記、井沢広行氏と共同で、革命的な年次総会議事提案を書いたのは、おそらくそのせいです。また『学習の学習』に研究部会の運営に関わる情報や議論を掲載しようと決めたことの背後にも、そうした気づきがあります。第二言語使用者としての自分、そしてバイリンガリズムに関わる問題を、前よりも意識するようにもなりました。E-mailを使って編集についての相談をする中で、アンディ、リチャード、カイロン、スティーブは、日本語でもメッセージを書き始めました。こうして第二言語で書くのは日本語話者の委員会メンバーだけではありませんでした。これらのe-mailのメッセージの一部は、この号の中に引用されています。JALT 96関連のお知らせ、委員会メンバーの年間報告の中にも第二言語で書かれたものが数多く含まれています。さらに、廃刊となった*Learner to Learner*に代わるものとして、私たち自身の学習に焦点をあてた「学習する教師」というコラムも新設しました。読者の皆さんが、この号を、そして谷口さんとスティーブが、新しく『学習の学習』に参加してもらう予定のコラム編集係と一緒に作る、これからの『学習の学習』を楽しんでくだされば、幸いです。

この号の創造に関わったすべての人たちを代表して
リチャード・スミス、青木直子

JALT東京支部春期大会の報告/Tokyo JALT Spring Conference

JALT東京支部春期大会が、1996年2月25日(日)、文京女子短期大学で開催されました。学習者ディベロップメント研究部会は、日本語教育研究部会と共同で、漢字の学習と教育をテーマとした分科会を行いました。また、学習者ディベロップメント研究部会のメンバーによる発表も数多くありました。以下、発表の内容を報告します。

The Tokyo JALT Spring Conference was held at Bunkyo Women's Junior College on February 25th (Sun.), 1996. The LD N-SIG and JSL N-SIG jointly organized a strand of presentations on kanji learning and teaching. There were also many other presentations by LD N-SIG members.

1. 漢字の学習と教育

- 1) 漢字の論理と漢字の指導の論理 (西口光一)
- 2) 教師、力関係、漢字 (ステイシー・タービン)
- 3) 語彙としての漢字—その教育と学習— (浜田盛夫)
- 4) 怠け者の学習者のための漢字 (リチャード・スミス)
- 5) パネルディスカッション

西口氏は漢字の論理を明らかにし、それを漢字教育の観点から検討した。そして学習者の能力発達の観点を重視した漢字教育へのアプローチを提唱した。タービン氏は漢字学習に関する自分の経験を振り返り、語学教師が学習者に与える正または負の影響力の大きさについて指摘した。浜田氏は漢字を語彙として捉えるという観点から、漢字学習と教育を考え直す提案を行い、入門期の漢字指導例も紹介した。スミス氏は日本語学習、特に漢字学習について自分の経験を語った後、いくつかの漢字教材を検討し、参加者と意見交換を行った。パネルディスカッションでは、発表者と参加者がいっしょに漢字学習と教育について活発に意見を交換した。そのうちのいくつかを紹介する。

*漢字学習は孤独な作業のように思えるが、グループを作って共同学習をすることも可能だろう。

*現行の漢字教育シラバスは、学習者の発達段階に沿って作られていない。

*漢字の効果的な学習のためには、学習者自身が自分の学習スタイルをよく知って、それにあった学習ストラテジーを工夫することが大切である。

*漢字学習のためのリソースを共有する必要がある。

以上要約すると、漢字教育の質を高めるためには、学習者と教師、また日本人教師と外国人教師の間のさらに密接な協力関係が必要とされていることが改めて認識された。

(報告: 谷口すみ子)

2. 学習者ディベロップメント研究部会メンバーの発表

1) 漢字が楽しくなる

イブリン・ササモトとイトウ・シノブ

漢字は非常にしっかりとしたシステムを持ち、グループとしてつながっている。しかし、今までの漢字教育においては、このシステムが明らかにされず、個々ばらばらの漢字を丸暗記するしかなかった。イブリン・ササモトとイトウ・シノブは、基本的な漢字のシステムを体系化して示し、これを理解することによって漢字を遊びやゲームから学ぶ方法を紹介した。発表では、不思議なブラック・ボックスや絵カードを使ったかるた、あわせ漢字ビンゴゲームなどがデモンストレーションされた。

(報告: 臼杵美由紀)

2) リーダー・リスpons理論に基づいた言語意識のトレーニング

バリー・マティア

本発表は日本の中学、高校の生徒に対する、読み物への反応に基づいた言語意識のトレーニングの紹介である。生徒は宿題としてリーダーを読み、理解が困難だった点、言語形式や内容などについての疑問点を記録し、教室では小さいグループで各自の記録を持ち寄り、話し合いを行う。このアプローチにより、生徒は英語の文法、意味、用法にもっと目を向けるようになり、教師にとっても新しい気づきを提供した。

(報告: 谷口すみ子)

編集係注: このトレーニングについては *Learning Learning* 3/1にも記事が載っています。

3) 外国語学習におけるストラテジー使用

ロビン・L・ナジャー

外国語としての英語教育におけるストラテジー教育は、思考様式や学習タスク処理方法、問題解決手段等を活性化させる点で、とても意味のあることである。また、“ストラテジー”という言葉は、もちろん言語教育においては今や「流行言葉」となっているが、学習ストラテジー教育の重要性とその必要性は明らかに高い。現在英語を教えている大学生を観察してみると、言語運用能力の低いことは言うまでもなく、それ以前の目標言語の学習方法すら満足に知らないことが多

い。学習者ストラテジー使用に関して、2つの疑問を投げかけてみたい。第一に、外国語学習者は、学習ストラテジーのレパートリーをすでに持ち合わせているのだろうか。第二に、学習者はどの程度、学習場面でストラテジーを応用しているのだろうか。発表者の研究目的は、この2点について、言語学習におけるストラテジー使用の有効性を検討し、学習者がいかにストラテジーを実際の学習場面で使用しているかを考察することにある。そして、学習者が母語で運用しているストラテジーを外国語学習の際にも応用・運用することが大切で、外国語学習におけるストラテジーの存在と使用をもっと認識することが重要であると考え。 (報告：伊東祐郎)

4) 語彙学習のための記憶ストラテジー指導

後藤美納江

本発表は、高校と大学の英語の授業において、語彙学習のために記憶ストラテジーを教えることは可能かどうか、またそれは記憶の保持に効果があるかどうかを調査した報告である。調査の結果は、ストラテジー指導の有効性を示唆するもので、学習者の反応も概ね積極的であった。ただし、新しいストラテジーを採用するには充分時間をかけること、このようなストラテジー教育の目標を明確にすること、そして学習者自身の持っているストラテジーに対しても配慮することを忘れてはいけないであろう。 (報告：後藤美納江)

5) 学習者の自律性を意識づけるために：言語学習日誌をもとに

臼杵美由紀

本発表は、日本の大学レベルの英語学習者の自律性確立への試みの実践報告である。発表者は、授業に学生を主体的に関わらせるために、母語による言語学習日誌を取り入れ、学生個々との対話を通じて自律への働きかけを行った結果、学生の英語学習への自律性が高まったことを報告した。この実践の過程で発表者が、学習者をコントロールしようとする「学習者トレーニング」というスタンスから「教師も学習者のひとりで学習過程を学習者と共にする」というスタンスに変わっていったことは今後の展開の新しい局面を提示した。学習者同士の働きかけも含めて教師主導型から学習者中心の語学学習への展開を基本に考えていく発表者の姿勢がよく伝わった発表である。 (報告：野沢 智子)

3. JALT東京支部春期大会に参加して

臼杵美由紀

「教師は、どの程度学習者のフラストレーションを把握しているだろうか？」2月25日に行われたJALT東京支部春期大会における漢字の学習と教育の発表は、日本語教師の一人として過去を過ごしてきた私にそんな疑問を投げ掛けた。

学生は、日常の学習の中で、自分の問題を訴えかけてくることがある。その時、我々教師は、どのような対応をしてい

るだろうか。その訴えを教師は、どのくらいの深さで感じることができているだろう。本当に学習者中心・学習中心を考えているのなら、教師は教師としての視点をまず取り去って、学習者の声を聞く耳を持たなければならないと思う。教師としての視点に立った様々な理論よりも、実体験から得た学習者からの正直な訴えは、教師としての私の内面に大きく響いた。もっともっと学習者の真の訴えを聞きたい。そしてそこから学びたい。私は、外面は教師として教える役割を演じているが、内面は、実は目の前にいる学生からもっともっと学びたい学習者だと思う。

私は、ある日本語学習者達と日記のやり取りを試みている。初めは、日記を自律性向上の学習者トレーニングとして考えていた。そしてそのつもりでスタートした。しかし、学習者が自らの内面を表現してくるその日記から様々なことを学んでいるのは、実は、この私だということに気が付いた。今、私は、あくまでも教師の考えを主体とした学習者へのトレーニングのあり方に疑問を抱き始めている。教師と学生が学習過程を共有し、お互いに困難やフラストレーションを感じ合う。そして、その解決に向かって、一緒にゴールを設定していく：教師・学生の立場を越え、お互いにわらう、学ぼうとする意識(教師・学生双方が、学習者としての意識を持つこと)が必要だと思う。学習におけるコンピューター導入がますます大きくなる流れにあえて逆行して、人間にしか解決できない部分にもっと目を向けてみたい。

*Learning Learning*に、日本語学習者からの生の声がたくさん掲載されることを期待しています。

☆☆☆

1. Strand of presentations on kanji learning and teaching

- 1) Logic of kanji and logic of kanji instruction (Koichi Nishiguchi)
- 2) Teachers, power and kanji (Stacy Tarvin)
- 3) Kanji learning and teaching as vocabulary learning and teaching (Morio Hamada)
- 4) Kanji for lazy learners (Richard C. Smith)
- 5) Panel discussion

Nishiguchi examined the logic of kanji and its possible application to kanji teaching. He introduced the developmental nature of learners' kanji knowledge and skills and proposed a new approach to kanji teaching.

Tarvin reflected on the kanji instruction she had experienced in the past and discussed how language teachers have the power to positively and negatively influence their students.

Hamada focused on the idea of kanji as vocabulary and discussed its implication for kanji learning and teaching. He also introduced activities for an introductory kanji class.

Smith started his presentation by sharing his own experience as a Japanese language learner, especially regarding kanji learning. Then he reviewed some kanji teaching materials and exchanged ideas with participants.

During the panel discussion, participants were invited to share their own ideas for learning and teaching kanji with others. Among many questions, suggestions and opinions, here are some examples.

*Kanji learners are not alone. They can learn together as a group.

* Kanji teaching syllabi (if any) at present are not based on learners' developmental stages.

*For efficient kanji learning, utilizing various learning strategies based on the learner's own learning style is essential .

*Kanji learning resources should be shared with other learners.

To summarize, it was realized that there is a need for more cooperation among teachers and learners, and between native and non-native Japanese language teachers in order to improve the quality of kanji instruction.

2. Presentations by LD N-SIG members

1) Fun and Games with Kanji

Evelyn Sasamoto and Shinobu Ito Presenters focused the systematic nature of kanji and its inter-relatedness to one another. Traditional kanji instruction neglected this nature of kanji and rote learning of individual kanji was emphasized. Sasamoto and Ito presented a new approach to kanji as a system and demonstrated games and activities (magical black box, kanji picture cards and bingo) which aid the memory in linking kanji and kanji components together.
(reported by Miyuki Usuki)

2) Reader response-based language awareness training

Barry Mateer
This presentation introduced a reader-response approach to language awareness training for Japanese junior/senior high students. Students are asked to read graded-readers at home and write down questions

they have on language forms and contents. In class, students work together in a small group to pose and answer questions. Students are encouraged to become more aware of grammar, meaning and use, at the same time this approach has given new insights to the teacher.

(reported by Sumiko Taniguchi)

Editor's note: Learning Learning 3/1 has Barry's article on this topic.

3) Strategy Use in Foreign Language Learning

Robyn L. Najar

The word "strategy" has become a buzz word now. Indeed, the need to offer strategy instruction to the students is apparent. It has the benefit of activating thinking, ways to approach learning tasks to solve problems. Many college students have limited FL skills, and furthermore, lack skills in the area of "how to learn." The purpose of this study was to consider strategy use and how FL learners apply learning strategies in the context of FL learning. The following two questions were posed: (1) Do FL learners already have a repertoire of learning strategies? (2) To what extent do they apply these strategies in FL contexts? It is important for FL learners to be more aware of various strategies they use in their first language, and to apply these to their FL learning experiences.

(reported by Sukero Ito)

4) Memory strategy instruction for vocabulary learning

Minae Goto

The presenter discussed an informal experiment which was carried out to examine the possibility and effectiveness of memory strategy instruction for vocabulary learning in high school and university settings. The results suggested that such instruction was effective, and reaction from the learners was generally positive. However, the presenter noted the importance of factors such as reserving sufficient time for students to adopt new strategies, and emphasizing the goal of strategy instruction clearly while showing respect for the learners'original strategies.

(Reported by Minae Goto)

5)Improving Awareness for Learner Autonomy through Diary Writing

Miyuki Usuki

This presentation focused on classroom research conducted in Japanese university English classes for promoting learners' awareness of autonomous learning. The presenter addressed the usefulness of diary writing in learners' native language as a medium of personal communication between a teacher and

of personal communication between a teacher and learners in terms of improving learner autonomy. In the course of diary writing, it was observed that the teacher's attitude changed from "learner training" to "teacher as a co-learner". This shift from teacher-centered to learner-centered approach was quite remarkable in this presentation.

(Reported by Tomoko Nozawa)

3. My reflections on Spring Conference

Miyuki Usuki

To what degree do Japanese teachers understand their students' frustrations? Even as an experienced Japanese teacher, a series of presentations on Kanji learning and teaching really made me think.

In their everyday study, students must face many problems. We teachers want to know how to react to them. How deeply are teachers able to feel the claims of their students? If we are really thinking about being student orientated, we have to stop listening to our students from the vantage point of teacher and try to listen to them very carefully. As teachers we tend to look at problems from a logical or theoretical point of view. On the outside, I am a teacher who is teaching, but on the inside, the truth is that I am really a learner who wants to learn from the students right in front of my eyes.

One time I had some of my Japanese students write diaries. At the beginning, I was thinking it would be good training in autonomous learning for the students. However, I came to realize that I was the one truly learning from their entries. Now, I am beginning to have doubts that has to be so absolutely teacher centered/orientated. The process of learning belongs to both teachers and students; we need to recognize our mutual frustrations and difficulties. Then we will be able to reach our goals together. Both students and teachers need to have a desire to understand and learn from one another, we both need to have a learners consciousness.

Computer assisted instruction is gradually becoming more and more a part of language teaching. If I may dare to go against the trend, I would like to focus on the aspects of teaching only humans can do.

I hope to keep learning from the voices of Japanese learners in *Learning Learning*.

(All translation by Tracy Tarvin)

INFORMATION ON LEARNER TRAINING SITES IN JAPAN NEEDED

We have received a request from Dr Joan Rubin for assistance in finding language programs in Japan that are doing learner training. If you know of any sites, please contact her at the address below.

"As a Mellon Fellow this year, I am researching the question of "Pedagogical Frameworks for Learner Self-Management" I want to identify a variety of types of sites which exhibit good practices in autonomy instruction. Toward this end I am also looking at the parameters which characterize good instruction (such as measures of autonomy, and measures of the development of increased autonomy). [I am interested in] sites in Japan that have instituted strategy and autonomy instruction and are known to have been doing so for several years (3 or more)"

Dr. Joan Rubin

Mellon Fellow
National Foreign Language Center
Johns Hopkins University
1619 Massachusetts Avenue, N.W.
Washington, D.C. 20036
USA
E-Mail: MELLON2@mail.jhuwash.jhu.edu
FAX 202-667-6907

日本における学習者トレーニングに関する情報を求む

ジョアン・ルビン博士が、日本で学習者トレーニングを取り入れている語学プログラムを探しており、学習者ディベロブメントN-SIGに協力依頼がきました。ストラテジー/学習者トレーニングを3年程度以上行っている機関をご存じの方は、以下のところに直接連絡してください。

「今年度のメロン・フェローとして『学習者の自己管理のための教育的フレームワーク』の研究をしています。その中に、効果的な自律性の指導訓練を行っている種々の機関についての情報も盛り込みたいと考えています。この目的のため、優れた指導を特徴づける要素（自律性やその度合いの向上の測定基準など）も同時に検討しています。日本におけるストラテジーや自律性の指導を3年以上行っている機関があったら、教えてください。」

Dr. Joan Rubin (連絡先は英文参照)

Reports from the Teacher/Learner Development Action Workshops held at Meiji University on May 18th, 1996

教師と学習者のディベロプメントのためのアクション・ワークショップ報告

56 people took part in this half day of action workshops jointly organised by Learner Development and Teacher Education N-SIGs, with the help of Tokyo JALT Chapter and Meiji University. Nine 75-minute action workshops took place in parallel through the afternoon, with a final hour-long bilingual plenary summary/discussion session. The workshops were intended to be participant-centred and to involve experiential learning; our collective first report below explains in more detail the philosophy behind the event, while the following two contributions report on individual workshops.

A Multi-Perspective Genealogy

Richard:

The idea for these workshops came about last year, through the coming together of various people's interests in exploring the interface between learning and teaching, in ourselves and in our students. In organizational terms, members of the Learner Development and Teacher Education N-SIG committees started out (via email brainstorming) with the intention of attempting "a different kind of event", not just for the sake of it, but for specific reasons several of us seemed to agree on.

Cheiron:

Let's try something totally new with formats. I am tired of the usual papers and workshops and demonstrations, aren't you? How can we make the medium the message? How can participants become active generators of ideas from the beginning?

Richard:

I'm also tired of the typical structure of conferences and agree the medium should be the message - we can't get away from "expert-centred" ways of thinking (even if what they're doing / talking about is "learning centred" approaches) unless there's change in the hierarchical *structures* of teacher conferences

Andrew:

Something without speakers or totally participant-centred...

Naoko:

Planning something that's totally different from usual conferences. That was an exciting idea. We also agreed in the very beginning stage that the event would be bilingual to secure equal participation by Japanese and English speaking people...Our project, however, was not without a problem. During the course of e-mail brainstorming which was carried out exclusively in English, I felt overwhelmed by the amount of writing. ... I somehow withdrew from the discussion before we reached a consensus. There was a language barrier which I hadn't known existed. Achieving equality is not an easy task. I wonder what else the Learner Development N-SIG could do on top of everything we've tried to achieve the goal.

Cheiron:

We succeeded in sharing responsibility for planning a conference and in doing it bilingually to an extent that is rare in any multinational group. We showed that a group of Japanese and non-Japanese people all over Japan could organize a conference almost all through e-mail, and largely reach consensus on the goals and process. Some of the problems we had along the way can also be lessons to JALT members in general. As Naoko points out, virtually all the e-mail conversations took place in English. And though we were all committed to bilingualism, few of us are truly bilingual. The burden falls most heavily on those few people who can interpret/translate. Interpretation and translation are especially time- and energy-consuming... Another tendency all of us faced was being able to put off replying to e-mail or making decisions on e-mail in a way we couldn't do in a face-to-face meeting. Perhaps e-mail should be supplemented with at least one meeting at a key time. We need to see each others eyes and hear each other's voices at times to achieve more sympathetic communication.

Andrew:

e-mail to denwa o tsujite, de ironna atarashi koto o kokoromi, takusan no hito ni sankashite moraii, yueki na toron mo so de nai mono mo yarimashita. nihongo o tsukawanakatta ga, takusan no benkyo wa dekiru si, takusan no omoshiroi hito ni sankashite morai, soshite

atarashi ichinichikaigi - puroseshu-gakushu - jibun no chosho ya tansho o saininshiki suru koto - totemo tanoshikatta.

We tried something new, we involved a lot of people, we had ups and downs on e-mail and telephone calls, we didn't discuss everything bilingually, we enjoyed ourselves, we learnt a lot, and we brought together a lot of interesting people, and we created a new kind of one-day conference - process learning, with all our strengths and weaknesses'

Richard:

For me, the process of email brainstorming and coming to consensus in joint creation of an innovative "event" was a valuable learning experience in itself, and this excitement can perhaps only repeat itself anew (for others) if future events are arranged with fresh minds! I feel, however, some of the innovations we did achieve are worth recording: 1) non-hierarchical, consensus-oriented decision-making process: sense of shared responsibility for the event, involving workshop facilitators as "organizers," also, 2) a majority of participant-centred workshops involving experiential learning, 3) bilingual publicity and a bilingual final session, 4) a small (human) scale, non-profit-making event (we didn't make a loss, either!)

Workshop Reports

Andy Barfield reports on the workshop that he led - "Development through Drama through Reflection."

The question I held as I planned the workshop was : How can we go beyond routines of behaviour in life and find new energy and ideas for the future? How, in other words, can we sustain our personal and professional growth? One part of the answer for me lies in the influence of positive role models on us in our lives - particular people that we have respected and felt affection for, people that we have in some way tried to emulate in our own ways. Putting ourselves again in contact with such positive role models can have a powerful de-routinising effect on the way we see ourselves, our beliefs, sense of capability and actions. And this positive effect can be strengthened through reflective listening and dramatization ... Through the dramatization, it seemed that some participants came to a new awareness of themselves. One person reported that she realised how little time she took to listen to her students as individuals in their own right; another reported that he had wanted to talk about such things for years with a colleague but that he never had

a proper chance to. Another focussed on the gentle letting go of the positive role model that happens as we become more aware of ourselves : "I learned from your workshop that if you want to go deeper or be aware of yourself, there are certain things you must face, some of them are unpleasant, but that's the way life is. ... through the dramatization, I realized that I have different wants and needs. I can't be like (name of positive role model), she is her own person."

M. Angela Clarke and Susan S. Davis give a participant report on "How to Create and Sustain a Writing Support Group for Professional Development," led by Christine Pearson Casanave and Amy D. Yamashiro.

The facilitators presented their ideas for starting a writers' support group for professionals interested in publishing articles based upon their experiences producing three monographs.

A writing support group requires disciplined, committed writers with a specific purpose. Once the purpose has been established, it is essential to determine if funding is available from the university for the project. When the university approves funding, the group must decide upon deadlines, guidelines and clear responsibilities for each member of the group. The process begins with a brainstorming session in which members discuss their ideas. Usually, the project requires two to three peer editing sessions in which writers bring multiple copies of their manuscript and distribute them among the group for an all-day editing session. The presenters emphasized at this point that the writers do more than merely edit the papers: they must be willing to provide constructive criticism in a sensitive manner. This may be the most difficult part of the process as it requires complete trust among members of the group and a willingness of each writer to provide substantive feedback rather than grammatical and mechanical corrections. In the final stages of the peer editing, one member must assume the responsibility for informing any writers whose manuscripts may not be ready for publication.

After discussing guidelines for organization of the peer editing process and distributing handouts regarding the guidelines and the writing process, the participants were divided into groups of four and given seven minutes to freewrite on a topic of current interest. In groups, we read each other's writing, provided written responses, and then discussed them. This activity enabled participants to experience the early stages of the writing process in a support group.

Afterwards, participants discussed their reactions to the process. Most people agreed that trust and tact are needed in order to freely respond to others' writing. As most people in this group had not met before, there was some hesitancy to comment on other participants' writing. The presenters pointed out that this is a normal part of peer editing and only through trust and mutual respect will this problem be mitigated. It was obvious that trust, which seemed the greatest concern for the audience, is something that is developed gradually. All writers must be willing to accept criticism and take risks. When asked how participation in a writing support group can help us as teachers, the presenters agreed that, as a result of their experiences in the support groups, they had certainly rethought what they ask their students to do as writers.

☆☆☆

学習者ディベロプメント研究会と教師教育研究会が共同で企画し、JALT東京支部と明治大学のサポートで実現した「アクション・ワークショップ」には、56名の参加者がありました。土曜日の午後に、参加者中心の経験学習の場として計画された75分のワークショップが9つ同時進行で行なわれ、1時間の最終討議は日本語と英語の両方を使って行なわれました。この報告の初めの部分では、企画に関わった何人かのコメントを集めることで、この催しの背後にあった「哲学」を明らかにしたつもりです。その後、2つのワークショップのレポートが続きます。

複数の視点から見た歴史

リチャード・スミス：

このワークショップのアイデアは、我々自身と我々の学生の中の学習と教授のインターフェイスについて探究したいという様々な人の関心がもとになって、生まれた。具体的には、学習者ディベロプメント研究会と教師教育部会のメンバーの何人かが、e-mailを通じたブレインストーミングの過程で、何かいつもと違うことをやりたいと思ったのが、始まりである。そこには、ただ違うことをやるというだけではない、もっともな理由があったと思う。

カイロン・マクマヒル：

何かまったく違う形式にしない？ふつうの論文とワークショップとデモンストレーションで、もうあきあきしたわ。みんなはどう？メディアをメッセージにすることって、できないのかしら。参加者が初めから積極的にアイデアを産みだせるようにするには、どうしたらいいのかしら。

リチャード・スミス：

ぼくも典型的なコンフェレンスのやり方はもうたくさんだな。メディアはメッセージであるべきだと思う。教師の集まりからヒラルキー構造をなくさないで、学習中心のアプローチを実践したり、それについて発表したりしても、「専門家中心」の思考からは逃れられないと思う。

アンディ・バーフィールド：

発表者なんていなくて、完全に参加者中心のやつがいい。...

青木直子：

ふつうとまったく違うコンフェレンスをやろうというアイデアはとても面白かった。それに、まず初めに、日本語話者も英語話者も平等に参加できるように、バイリンガルでやろうと合意できたのもよかった。...しかし、問題がなかったわけではない。E-mailでのブレインストーミングでは、みんな英語しか使わなかったから、メールの量には辟易した。...コンフェレンスのやり方についてコンセンサスができあがる前に、私はディスカッションからリタイアしてしまった。こんなところに言葉の壁があるとは思わなかった。平等を実現するのはかんたんなことではない。言語の上の平等という目的を実現するために、学習者ディベロプメント研究会は、今まで試みてきたことのほかに、何ができるだろう。

カイロン・マクマヒル：

コンフェレンスを計画する責任をみんなで分担するということには成功したし、それをバイリンガルでやるという目標も、他の多国籍グループではめったにないといっているくらいには、達成できたと思う。日本中にちらばった日本人と外国人のグループが、e-mailだけを通じてコンフェレンスを企画でき、そこで目的やプロセスについての合意も形成できるということ、私たちは示したと思う。私たちの経験したいくつかの問題も、JALT会員一般に、いい教訓になると思う。直子もいっているように、e-mailでの会話は英語ばかりだった。私たちはみんなバイリンガリズムの重要性を認識していたけれど、本当にバイリンガルといえる人はほとんどいない。だから、翻訳と通訳というとりわけ時間とエネルギーを必要とする仕事が、二つの言葉を使える少数の人に集中する。...もうひとつの問題は、E-mailだと、返事を書いたり、意志決定をするのをかんたんに後回しにすることができるということだ。実際に会って話をしたらそうはいかない。E-mailを補完するものとして、少なくとも1回は、実際に会って、相手の目を見ながら、その声を聞くことも、より協力的なコミュニケーションには必要だと思う。

アンディ・バーフィールド：

e-mail to denwa o tsujite, de ironna atarashi koto o kokoromi, takusan no hito ni sankashite moraii, yueki na toron mo so de nai mono mo yarimashita. nihongo o tsukawanakatta ga, takusan no benkyo wa dekiru si,

takusan no omoshiroi hito ni sankaisite morai, soshite atarashi ichinichikaigi - puroseshu-gakushu - jibun no chosho ya tansho o saininshiki suru koto - totemo tanoshikatta.

リチャード・スミス：

ぼくにとって、斬新な催しをみんなで創造するのにe-mailでのブレインストーミングを通じて合意を形成していく過程は、それ自体、貴重な経験だった。将来、またコンフェレンスを企画するとしても、スタッフがこういうエキサイティングな経験をするには、初心にかえってゼロから考え始めることが必要だろう。しかし、ぼくたちの達成した以下のようなことは、記録に値すると思う。1) ヒエラルキーなしの合意を前提とした意志決定のプロセスと、ワークショップのファシリテーターにも「組織委員」として関わることで得られた責任を共有するという感覚、2) 経験学習を可能にする参加者中心のワークショップが大半だったこと、3) 広報と最終討議をバイリンガルでできたこと、4) 人間的な小さい規模の催しで、利益を出すことを前提にしなかったこと。(赤字もださなかった！)

ワークショップ報告

まず、アンディ・バーフィールドが、彼自身のワークショップ「ドラマと内省によるデヒベロップメント」を報告します。

このワークショップのプランを作るときに私が考えたのは、日常の習慣化した行動を超えて、未来につながるエネルギーとアイデアを見出すにはどうしたらいいのか、つまり、どうしたら、われわれは個人的、また職業的成長を続けられるのか、ということだった。

その答えの一部は、われわれの人生における肯定的役割モデルの影響にあると思えた。特に、われわれが尊敬し、愛情をもち、自分なりにその人の見習おうと思った人。そういう人とのつながりを再認識することは、われわれが自分自身や自分の信念、能力、行動を見直すために強い効果をもつことがある。そして、この肯定的効果は、内省的傾聴とドラマ化によって、より高まる。... ドラマ化を通じて、新しい自己意識に目覚めた人もいたようだった。ある参加者は、自分が、個人として発言する学生の話を書く時間をほとんどもっていないのに気づいたと報告した。別の参加者は、こういうことをある同僚と話したいと長年、思っていたが、しかるべき機会がなかったといった。また、ある参加者は、われわれが自己への気づきを高めるにつれてよく起こる肯定的役割モデルとのやさしい別れに注意を向けた。「このワークショップで、自分をより深く知ろうとすれば、きちんと対面しなくてはいけない事柄があることを学びました。それらの中には快くはないこともあります。でも、しかたありませんね。... ドラマ化を通じて、私は〇〇さん(肯定的役割モデルの名前)とは違う欲求や必要をもっているのがわかりました。私は彼

女のようにはなれません。彼女は彼女自身ですから」

次に、M・アンジェラ・クラークとスーザン・S・デイビスが、クリスティン・ピアソン・カサネイブとエイミ・D・ヤマシロによるワークショップ「職業的成長のための論文執筆サポート・グループの始め方と続け方」の報告をします。

このワークショップでは、3冊のモノグラフを出版した経験にもとづいて、論文を出版したいと考える人たちのサポート・グループの始め方が示された。論文執筆サポート・グループは、特定の目的をもった、統制のとれた熱心な書き手たちを必要とする。目的がはっきりしたら、大学からそのプロジェクトのために予算がもらえるかどうかを確認することが必要不可欠である。予算がもらえたら、締切、執筆要領、メンバーそれぞれの責任を明確に決める。そして、まず、メンバーそれぞれが自分のアイデアを話すブレインストーミングを行う。次に、それぞれが自分の原稿のコピーを人数分用意して、全員に読んでもらう編集セッションを行う。これは一日がかりの作業で、通常、2、3回、必要である。発表者がここで強調したのは、これらのセッションでは、単に論文を編集するだけでなく、相手を傷つけずに建設的な批評をしなくてはならないということである。これには、メンバーの間に完全な信頼関係が成り立っていて、書き手それぞれが、文法的、機械的な訂正だけでなく、実質的なフィードバックをしあう気になっていることが必要だから、全過程の中で、ここどこかがいちばんむずかしいかもしれない。最後の段階では、一人のメンバーが出版するには無理な原稿の書き手に、そのことを伝える責任をもたなくてはならない。

相互編集の過程が説明され、ガイドラインと執筆過程についての資料が配布された後、参加者たちは4人ずつのグループに分かれ、7分間で目下、興味のある話題について自由に書いた。そして、グループで互いの書いたものを読み、コメントを書いて、それらについて話し合った。この活動のおかげで、参加者は、サポート・グループの執筆過程の初めの部分を体験できた。

次に、参加者は、この過程についての感想を話し合った。ほとんどの人は、他人の書いたものに対して自由に意見をいうには、信頼と気転が必要だと納得した。多くの人が初対面だったため、コメントをするのをためらう傾向もあった。発表者は、それが相互編集では、ふつうに感じられることであり、互いに信頼し敬意をもつことでしか、この問題を軽減することはできないと指摘した。信頼は、参加者の間では最大の関心事のようであったが、徐々にしか育たないものであるのは明白である。すべての書き手が、批評を受け入れ、カケをすることに前向きでなければならない。サポート・グループに参加することで、教師として何を学んだかという質問に、発表者は、サポート・グループの経験から、学生に書き手として何をすることを望むかを考え直したと答えた。

(翻訳：青木直子)

Teachers as Learners/ 学習する教師

We hope that this (new) column will serve as a forum for continued exploration by LD N-SIG members of their own learning, taking over something of the role that the "Learner to Learner" newsletter played in the past. We're very grateful to Roberta Welch and Tomoko Hongo for sending in their ideas for kanji learning below.

廃刊になった *Learner to Learner* に代わって、学習者ディベロプメント研究部会のメンバーの皆さんが自分自身の学習について探究する場として、新しくこのコラムをもうけました。第一回めの記事は、東洋女子大学のロバータ・ウェルチさんと東京農工大学の本郷智子さんの作った教授会漢字タスクです。教授会に出席して手持ちぶさたでいるよりは、配布資料を教材にしてしまおうという、日本語を母語としない先生たちのための漢字の勉強のためのアイデアです。

FACULTY MEETING KANJI TASKS

Roberta A. Welch, Toyo Women's College

Tomoko Hongo, Tokyo University of Agriculture and Technology

- Intended students:** Non-Japanese teachers who sit in on faculty meetings and lament the fact that they are illiterate or semi-literate in Japanese. (Or those who are just bored to death.)
- Kanji level:** Elementary or intermediate.
- Prerequisite:** Reading knowledge of hiragana is recommended.
- Place:** Faculty meeting.
- Materials:** Task, faculty meeting handouts, pen or pencil (colored highlighters for the more artistically inclined).
- Underlying pedagogical assumption:** Doing something is better than doing nothing.

I. Kanji Recognition Task

Level: Elementary

A. Circle these kanji on your faculty meeting handouts.

B. Fill in the () with the meaning. Use your dictionary if necessary.

がく

1. 学(learning) [Japanese children learn 学 in the 1st grade.]

だいがく

にゅうがく

大学 (a.) 入学 (b.)

きゅうがく

たいがく

ふくがく

休学 (temporary absence from school) 退学 (withdrawal from school) 復学 (return to school)

にゅう

2. 入(enter) [1st grade]

にゅうし

にゅうがく

入試 (c.) 入学 (see above)

せい

3. 生(live) [1st grade]

がくせい

せんせい

いちねんせい

学生 (d.) 先生 (e.) 一年生 (1st year student)

4. きょう 教(teach) [2nd grade]
 きょうじゅかい 教授会 (faculty meeting) きょういく 教育 (f. _____) きょうざい 教材 (g. _____) きょうむ 教務 (educational affairs)
5. かい 会(meeting) [2nd grade]
 かいぎ 会議 (meeting, conference) きょうじゅかい 教授会 (see above) いいんかい 委員会 (h. _____)
6. Kanji of your choice

II. Vocabulary Task

Level: Intermediate

A. Circle these items on your faculty meeting handouts and divide each phase into meaningful words.

ex. 勉強会 → 勉強/会 [2]

- | | |
|-----------------|-------------|
| 1) 教授会議事要録 [4] | 5) 庶務課 [2] |
| 2) 報告及び説明事項 [4] | 6) 研究費 [2] |
| 3) 審議事項 [2] | 7) 入学試験 [2] |
| 4) 懇談事項 [2] | 8) 図書館 [2] |

B. Now, match the pronunciation and meaning of each phrase.

- | | | |
|-------------------|-------------|------------------------------|
| A. けんきゅうひ | 1) 教授会議事要録 | a. entrance examination |
| B. きょうじゅかいぎじょうろく | 2) 報告及び説明事項 | b. faculty meeting minutes |
| C. こんだんじこう | 3) 審議事項 | c. general admission section |
| D. しんぎじこう | 4) 懇談事項 | d. library |
| E. にゅうがくしけん | 5) 庶務課 | e. items for open discussion |
| F. としょかん | 6) 研究費 | f. items for deliberation |
| G. しょむか | 7) 入学試験 | g. reports and explanation |
| H. ほうこくおよびせつめいじこう | 8) 図書館 | h. research fund |

C. For extra credit: For each of the following suffixes (1-4), make up two words by combining it with the appropriate items (a-h).

1. --館 2. --費 3. --会 4. --課

a.交通 b.人事 c.美術 d.祝賀 e.経理 f.大使 g.送別 h.交際

- | | | | |
|--------------|-----------|--------------|-----------|
| 1. (館) | (館) | 3. (会) | (会) |
| 2. (費) | (費) | 4. (課) | (課) |

Answer Key is on page 18.

On-going CONTEST!!

For those of you who are inspired by these tasks or who find them lacking, please design your own and send them to: Roberta A. Welch, Nakamachi 2-18-10-202, Musashino, Tokyo 180. Winning entries will be published, and all participants will receive certificates of recognition from the official Faculty Meeting Kanji Task Contest Committee.

Journal Reviews/雑誌から

Evelyn Sasamoto and Andrew Barfield are scanning recent issues of journals for articles related to learner development and report on their findings in this column. In this issue, however, we have a guest reviewer who has a look at *Nihongo Kyoiku* and *ELT Journal*.

✳ Koyama, Satoru. (1996). Jiritsu gakushu sokushin no ichijo to shite no jiko hyoka (Self-assessment: A strategy for autonomous learning). *Nihongo Kyoiku (Journal of Japanese Language Teaching)*, 88, 91-103.

The author of this article claims that in spite of the growing interest in learner autonomy in JSL, little research has been done to find out how teachers could guide learners towards learner autonomy. The paper proposes that self-assessment can be a tool to nurture learner autonomy, and, after reviewing research literature in English, reports the results of a research project to examine 1) how learners view their Japanese language proficiency, 2) how reliable self-assessment by learners is, and 3) characteristics of learners' self-assessment behaviour. 66 Asian learners of Japanese in a pre-college language programme filled out two kinds of self-assessment forms, one based on Type C questions in Oskarsson (1980) and the other on graded statements in LeBlanc & Painchaud (1985), in their L1 with the one exception of a Burmese learner who used an English version. The teachers of these learners completed the same forms to provide teacher assessment data. Analysis showed that 1) Type C data revealed no statistically significant difference between learners' self-assessment and teacher assessment, 2) writing ability was assessed significantly lower than reading, listening and speaking by learners in Type C questions, 4) correlation of learners' self-assessment and teacher assessment on Type C questions was reasonably high, 4) grading of statements by the researcher did not necessarily correspond with the difficulty level felt by the learners, and 5) learners tended to assess themselves as being in the middle group whereas teachers' assessment had a wider range of levels.

References:

LeBlanc, R. & Painchaud, G. (1985). Self-assessment as a second language placement instrument. *TESOL Quarterly*, 19/4, 673-687.

Oskarsson, M. (1980). *Approaches to Self-Assessment in Foreign Language Learning*. Oxford: Pergamon.

✳ Widdowson, Henry G. (1996). Authenticity and autonomy in ELT. *ELT Journal*, 50/1, 67-68.

In this short article Widdowson raises the question of whether autonomy and authenticity in ELT are complementary or contradictory ideas. Widdowson observes that a typical argument for authenticity in second language learning goes: if we are to teach English "as it functions in contextually appropriate ways", we have to teach "how people who have the language as an L1 actually put it to communicative use". Advocates of autonomy, on the other hand, claim that if the process of learning "is to be activated effectively, then we need to appeal to the learners' own experience, and get them engaged on their own terms." If we follow this argument, Widdowson argues, "contexts which will be meaningful for them (learners) have somehow to be constructed in the classroom out of their primary experience of first language and culture" and "they cannot be replicated versions of native-speaker contexts of use." Widdowson asks if there are "ways, in practice, of reconciling these contraries."

Reviewed by Naoko Aoki

We still need help with scanning and brief reviewing of Japanese language journals. This involves looking out for learner development related articles in publications you have regular access to, and writing brief reviews for the Journal Reviews column in "Learning Learning." Sukero Ito, LD N-SIG co-librarian, is waiting to hear from you if you can help out. Sukero can be contacted at:

Tokyo Univ. of Foreign Studies
5-10-1 Sumiyoshi-cho, Fuchu-shi, Tokyo 183
Fax (w): 0423-68-0393



このコラムは、アンディ・バーフィールドとイブリン・ササモトがいろいろな雑誌の中からみつけた学習者ディベロプメントに関係のある記事を紹介していますが、この号は、編集係が特別出演で『日本語教育』とELT Journalの記事をレポートします。

✳ 小山悟 (1996) 「自律学習促進の一助としての自己評価」『日本語教育』 88号 91-103.

この記事の中で著者は、JSL(第二言語としての日本語)において自律学習に対する関心は高まっているにもかかわらず、教師達がいかにして自律学習に向けて学習者を導いていくことができるかを見出すための研究は殆どなされていなかったと主張している。この論文では、自己評価は自律学習力を育むための道具となりうることを提案し、英語による研究文献を再見した後、著者の研究の結果を報告する。その研究とは1) 学習者がいかに自らの日本語能力を見ているか、2) 学習者による自己評価はどのくらい信頼性があるか、そして3) 学習者の自己評価行動にはどんな特徴が見受けられるかを吟味するためのものである。大学入学準備言語学習プログラムに在籍する、66人のアジア人学習者がL1(第一言語)で二種類の自己評価表に記入した。(ビルマ人学習者1名は英語版を用いた。)評価表の一つはオスカーソン(1980)のC型の質問に基づいたもの、もう一つはルブランとベンショー(1985)の段階式質問表に基づいたものである。これらの学習者を担当する教師達も教師による評価データを提供するため同じ用紙に記入した。その結果、1) C型質問表を基にした回答で学習者の自己評価と教師の評価との間には統計的な有意差は見られなかった、2) C型質問表での学習者の作文能力の評価は読解、聴解、そして話す能力の評価より有意に低かった、3) C型においては学習者の自己評価と教師の評価との相関関係はかなり高い、4) 段階式質問表において、筆者の想定した難易度のレベルは、必ずしも学習者が感じた困難さのレベルとは一致していない、そして5) 教師が比較的均等に学習者をレベル分けしているのに対して、多くの学習者は自分を中程度と評価する傾向がある、というようなことがわかった。

参考文献は英語版を見てください。

＊ ウィドウソン、ヘンリー・G.(1996). 「ELTにおける本物性と自律性」 *ELT Journal*, 50/1, 67-68.

この短い記事でウィドウソンはELTにおける自律性と本物性が相補的か相反的かという疑問を投げかけている。ウィドウソンは第二言語学習における本物性に対する典型的な論点は次のようであると言っている。もし私達が英語を「文脈上適切に機能するように」教えようとしているならば、私達は

「L1(第一言語)として身につけている人々がいかにそれをコミュニケーションに使うか」を教えなければならない。自律性擁護派は一方、学習過程を「効果的に活性化させるには、学習者自身の経験に訴え、また彼等自身のやり方で状況に関与させねばならない。」と主張している。もし私達がこの論理に従うならば、「第一言語と文化からなる彼等の直接的な経験のなかから、学習者に十分意味のある文脈、状況を教室の中で何とか作りださねばならないということになり、それは単なるネイティブ・スピーカーにとって意味のある文脈、状況のコピーではありえない」とウィドウソンは指摘してい

る。ウィドウソンは「実際面で、こうした対立を調和させる方法」はないだろうか、と問うている。

報告：青木直子、翻訳：奥村紀子

日本語の雑誌をチェックして、学習者ディベロプメントに関係のある記事・論文を探し、短いレビューを書いてくださる方がまだ見つかりません。いつもお読みの雑誌を担当してもいいという方がいらっしゃいましたら、学習者ディベロプメント研究部会司書、伊東祐郎さんまでご連絡ください。伊東さんの連絡先は以下の通りです。

183 東京都府中市住吉町5-10-1 東京外国語大学
Fax (w) 0423-68-0393



Members' Publications メンバーの書いた出版物

Members are encouraged to share information about their learner development related publications in this column. Please don't be modest! Send us details with a short summary of anything relevant you've written or co-authored. On offer this time round are :

Walsh, D. 1992. Assessing EFL Learner Strategies of Japanese College Students (1). *Hagoromo Gakuen Tanki Daigaku Kenkyu Kiyu, Bungakukahen*, no. 28. 35-55.

In this article, Daniel Walsh examines the nature and variety of language learning strategies and includes an overview of research methods and results of a number of previous studies.

Walsh, D. 1993. Assessing EFL Learner Strategies of Japanese College Students (2). *Hagoromo Gakuen Tanki Daigaku Kenkyu Kiyu, Bungakukahen*, no. 29. 51-68.

Here, Daniel reports on a series of investigations conducted among college students majoring in English. The study was intended to determine (1) the extent of students' awareness and use of learning strategies and (2) how closely the strategy performance of these students matches that of other learners reported in the research literature. The article details a variety of research approaches and is likely to be of interest and practical use to teachers /

researchers considering initial work in this area.

Copies of these articles can be obtained directly from the author. Please enclose a 130 yen stamped self-addressed B5 or A4 size envelope with your request :

Daniel Walsh,
Hagoromo Gakuen Junior College,
1-89-1 Hamadera Minami-machi
Sakai-shi, Osaka-fu 592



会員の皆さん、学習デベロプメントに関するご自分の論文その他についての情報提供をお願いします。遠慮は禁物です！単著、共著を問わず、書誌データと要約をお送りください。今回ご紹介するのは：

Walsh, D. 1992. Assessing EFL Learner Strategies of Japanese College Students (1). 『羽衣学園短期大学研究紀要文学科編』第28号, 35-55.

筆者は、言語学習ストラテジーの特質や様々なストラテジーについて論じている。また、研究方法および先行研究によって得られた知見を概観している。

Walsh, D. 1993. Assessing EFL Learner Strategies of Japanese College Students (2). 『羽衣学園短期大学研究紀要文学科編』第29号, 51-68.

ここでは、英語専攻の大学生を対象に行った一連の調査について報告している。目的は (1) 学生が学習ストラテジーをどの程度認識し、使用しているか、(2) 彼らの実際のストラテジー使用が、先行研究で報告されている他の学生たちとの程度一致しているか、の2点を明らかにすることであった。研究上の様々なアプローチも詳細に論じており、この分野で何か始めようという教師・研究者の参考になるだろう。

論文のコピーは著者から直接入手できます。130円分の切手を貼ったB5またはA4の返信用封筒を以下の住所にお送りください。

〒592 大阪府堺市浜寺南町1-89-1 羽衣学園短期大学
ダニエル・ウォルシュ

翻訳：池田智子



メンバーへのアンケート結果報告、 そしてメンバーのプロフィール Membership survey / Member profiles

学習者デベロプメント研究部会は、1996年の春にメンバーへのアンケート調査を行ないました。これは、メンバーシップ係の沖田弓子さんが、運営委員会のメンバーに報告したアンケート集計結果の要約です。

アンケートに答えてくれたのは13名です。そのうち10人は、過去一年間に学習者デベロプメント研究部会が企画した催しに出席できなかったと答えています。そして、そのうちの何人かは、自分の住んでいる地域でもワークショップや学習者デベロプメントの集いを行なうことを提案していました。『学習の学習』は全般的にいい好評で、これから発行される号の内容や形式について、多くの建設的なご意見をいただきました。また、学習者デベロプメント研究部会の経済状態を改善するためのアイデアもたくさん書いていただきました。回答を寄せてくださった皆さんにこの場を借りて、お礼を申し上げます。学習者デベロプメント研究部会がメンバーの皆さんのニーズに応えるためには、皆さんからのフィードバックが不可欠です。まだアンケート用紙をご返送いただいていない皆さん、遅すぎるといことはありませんので、ぜひ下記に回答をお寄せください。

143 大田区大森北4-14-7-401 沖田弓子
E-mail: QZY02342@niftyserve.or.jp

つぎに、アンケートの中の「学習者デベロプメントに、関係した実践や研究をなさっていたら、それについてお答えください」という質問への答えのいくつかをご紹介します。メンバーがお互いに知り合えるように、このような「メンバーのプロフィール」を今後も掲載したいと考えています。それが例えば、関心を同じくする人たちと共同のプロジェクトを始めるきっかけにもなるかもしれません。こちらのほうも沖田さんまで、どしどし情報をお寄せください。

ロイス・スコット・コンヴィ

関心のある分野--現在、次のようなことを授業で試みようとしています。自己評価、学習日記、学生同士の教えあい、学生の作ったテスト、ストラテジーの共有、ビデオと歌のトレーニング、ティム・マーフィーの*Language Hungry*という本。

ミドリ・タカシナ・イワノ

日本人の英語教師による授業での英語の使用

トマス・C・アンダーソン

今、プロジェクト・ワークについての論文を書いて、広島
のJALT 96で発表します。

西谷まり

以前から地域の日本語教育に関心を持って、実践もしていま
したが、現在は子供の日本語教育、学校適応に関心をもつて
おります。科学研究費をいただいて、週に1、2回学校に入っ
て、小学校の外国人子弟の日本語指導と教室観察をはじめた
ので、1年後には何らかの方向が見えていると思います。

西嶋久雄

以前、学習者の自立度と学習方法との関係をみた研究があり
ますが、アンケート形式でしたので、今読み直してみると客
観性に多々問題があります。

以上のメンバーの連絡先は、この号と一緒にメンバーの方た
ちに送られるメンバーシップ・リストをごらんください。ノ
ン・メンバーの方で、この中の誰かに連絡をおとりになりた
い場合は、青木直子 (eanaoki@ed.shizuoka.ac.jp)までお知
らせください。

☆

The Learner Development N-SIG conducted a membership survey in the spring of 1996. This is a summary of the survey results which Yumiko Okita, our membership chair, reported to the committee members.

13 members sent back the questionnaire form. 10 of them were not able to attend LD events during the previous year, and some suggested having workshops and get-togethers in their area. On the whole Learning Learning was highly valued, and a lot of constructive suggestions concerning the content and form of future issues were provided. Yumiko's report was also full of ideas for solving our financial problems. We would like to thank all those who participated in the survey. Your contributions will definitely help make the Learner Development N-SIG more responsive to members' needs. And to those of you who have not sent in the form, please do so any time. It's never too late!

Below are some of the responses to a question about "practice or research related to learner development you're engaged in or planning to start" We are hoping to publish more member profiles like these in future issues of *Learning Learning* in order to provide members with opportunities to get to know one other, and perhaps to start collaborative projects with others sharing the same kind of interests. Please send in any

information you'd like to share in this way to :

Yumiko Okita

4-14-7-401 Omori Kita,

Ota-ku 143

Tokyo

E-mail: QZY02342@niftyserve.or.jp

Lois Scott Convey

Interest areas-I'm currently trying to develop these for my classes: Self-evaluation, learning journals, Ss teach Ss, student generated tests, sharing strategies, video & song training. Tim Murphy's book *Language Hungry*.

Midori Takashina Iwano

Use of English in English class by a Japanese teacher of English

Thomas C. Anderson

I'm writing a paper on project work & doing a presentation at JALT 96 in Hiroshima.

Mari Nishitani

I've been interested in how we can locally support foreign residents to learn Japanese, and have taught as a volunteer. At the moment I'm particularly interested in JSL for children and their adaptation to Japanese schools. I visit a primary school once or twice a week to teach Japanese and to observe classes. This is part of my research funded by a Monbusho research grant. I'm hoping I'll have something to report in a year.

Hisao Nishijima

I studied the relationship between degree of learner independence and learners' ways of learning before, but in retrospect I have doubts as to the objectivity of the research, in which I used questionnaires.

Note : for contact details, see the list of LD N-SIG members sent separately (to LD N-SIG members only) with this issue of *Learning Learning*. Non-member subscribers please contact Naoko Aoki at eanaoki@ed.shizuoka.ac.jp if you should like to contact a person/persons listed here.



Learner Development N-SIG at JALT 96 in Hiroshima

JALT96広島大会での学習者ディベロプメント関連の発表と催し

This year's annual JALT international conference in Hiroshima is just around the corner. Unfortunately, our proposals for a colloquium and a roundtable were not accepted this year. However, there are still many presentations related to learner development scheduled.

広島国際会議場で開催される今年度のJALT年次国際大会が間近に迫りました。今年度は残念ながら、当部会のコロキウム、ラウンドテーブルの申込は採用されませんでした。学習者ディベロプメント関連の発表や催しはたくさん予定されています。

Saturday, November 2nd is the date to mark in your diary for main Learner Development N-SIG events at this conference!

学習者ディベロプメント研究部会の発表と催しは、主に11月2日（土）に行われます。

1) Presentation sponsored by LD N-SIG

学習者ディベロプメント研究部会後援発表

This year's sponsored LD N-SIG presentation is "Fostering learner autonomy : learner awareness" by Miyuki Usuki.

Venue: Rm. CS-703

Time: 4:15-5:00pm, Saturday, November 2.

The presentation will be mainly in Japanese, but with an oral summary and handouts in English. Non-native speakers of Japanese are warmly encouraged to attend!

今年の学習者ディベロプメント研究部会の後援発表は臼杵美由紀氏の「学習者の自律性向上を目指して」です。発表は主に日本語で行われますが、英語での要約も予定されています。

日時：11月2日（土）午後4時15分～5時

会場：CS-703号室

2) LD N-SIG Annual General Meeting

学習者ディベロプメント研究部会年次総会

5:15-7:00pm, Saturday, November 2, Room CS-703 : Right after Miyuki's presentation our annual bilingual general meeting is scheduled to be held in the same room. All LD N-SIG members and others interested are invited. See "Recording Secretaries' report" and "AGM agenda" elsewhere in this issue for more details. We will discuss next year's program-related matters including the plan for a kanji mini-conference, among other things. Come along and get (even) more involved!

11月2日（土）5:15-7:00pm, CS-703号室で、慣例のバイリンガル総会を開きます。臼杵さんの発表の直後、同じ部屋です。会員の皆さんも、関心をお持ちの会員でない方も、ぜひご参加ください。詳細はこの号に掲載した「書記報告」と「総会議案」をごらんください。かねてからボランティアを募っていた来年度の漢字ミニコンフェランスも含め、来年のプログラムについての話し合いもしたいと考えています。

3) Party!! パーティー!!!

Nelson Einwaechter in Hiroshima has found an Italian restaurant, Espresso Mario (7-9 Fukuromachi, Naka-ku, about a 10 minute walk from ICC, phone: 082-241-4956), for the annual LD party on Saturday, November 2. We are planning to get some "aperitif" at the Prentice Hall "One can Drink" party before heading off for dinner around 7:45. For a direction to the restaurant, see the LD N-SIG Display Desk notice board. Please let Jill Robbins (phone/fax 06-834-5311 (h); e-mail robbins@gol.com) know at least a few days before the conference if you're coming, although of course we'd welcome anyone who decides to come on the day!

広島在住のネルソン・アインワクター氏が、11月2日（土）に予定しているパーティーのために、エスプレッソ・マリオというイタリアン・レストランを見つけられました。（中区袋町7-9、大会会場から徒歩約10分、電話 082-241-4956）当日はプレントイス・ホール・ジャパンの"One Can Drink Party"で少し飲んでから、7時45分ごろにエスプレッソ・マリオに移動する予定です。道順はN-SIG展示デスクに掲示します。おいでになる方は、事前に、ジル・ロビンス(phone/fax

06-834-5311 (h); e-mail robbins@gol.com) までご連絡ください。もちろん、当日の飛び入りも大歓迎です。

4) Learner Development in the Park

公園の学習者ディベロプメント

11:15-12:45, Sunday, November 3rd : An informal colloquium to exchange ideas and discuss issues in learner development. Meet us at the LD N-SIG Display Desk at 11:15. For late comers we'll leave a note where we are. Bring your lunch and any material (rejected papers etc.) you'd like to share.

11月3日(日) 11:15-12:45 学習者ディベロプメントに関するアイデアを交換し、問題を話し合う非公式の集まりを計画しています。11時15分に展示デスクにお集りください。後からおいでになる方には、私たちの居場所のメモを残しておきます。昼食と、資料(不採用になった論文とか)がありましたらお持ちください。

5) LD N-SIG Display Desk

学習者ディベロプメント研究部会展示デスク

Throughout the Conference : LD N-SIG Display Desk in the lobby on floor B2 of the Conference Center. There'll be back issues of our publications and those of IATEFL LI SIG and HASALD for your perusal ("tachiyomi"), a board for your suggestions and messages, and other people to talk to about learner development (We hope! This largely depends on you!).

大会期間中、会議場地下2階のロビーに学習者ディベロプメント研究部会展示デスクを設けます。ニュースレターのバック・ナンバー、IATEFL Learner Independence SIG および HASALD のニュースレターの展示、メッセージ・ボードの設置などを考えています。また、だれかと学習者ディベロプメントについて話したい方もお立ち寄りください。(といっても、これは交代でデスクにつめてくださる方がいればの話です)

If you could be at the Display Desk for a certain period of time, please contact Jill Robbins, tel./fax: 06-834-5311 (h); email: robbins@gol.com or Yaeko Akiyama, tel./fax: 0898-47-2133 (h) now!

展示デスクをお手伝いいただける方は、広報係のジル・ロビンス (tel./fax: 06-834-5311 (h); email: robbins@gol.com) か秋山八重子 (tel./fax: 0898-47-2133 (h)) にご連絡ください!

6) Other related presentations

その他の関連発表

The following is a list of presentations related to learner development. Most of the information below is from the JALT Central Office's database, retrieved with the assistance of Larry Cisar. This list is not exhaustive, so please be sure to consult your conference handbook during the conference. The list includes talks by both LD N-SIG members and non-members.

以下の発表予定リストは、JALT事務局のデータベースから Larry Cisar 氏の協力で取り出したものを参考に選びました。当部会会員の発表も会員でない方の発表も含まれています。学習者ディベロプメント関連の発表を網羅するものではありませんので、大会ハンドブックでも確認の上、お選び下さい。

「 」内は英文タイトルを日本語に直したものです。発表者名、発表時間、会場番号は英文をご覧ください。

November 2 (Saturday) 11月2日(土)

- (1) Designing And Using Reflection/ Review Journals
Eric Bray
Time:9:30-10:15 Rm: CS-703
「内省をデザインし利用する: 復習ジャーナル」
- (2) An Interactive Approach To Writing
David Oisher
Time:11:45-12:30 Rm: Nissay D
「双方向アプローチによる書きの指導」
- (3) Training Students To Work In Cooperative Groups
Robert Horman and Christopher Jon Poel
Time:15:15-16:00 Rm: CS-703
「協調グループ学習のための学習者トレーニング」
- (4) Projecting Students Across Traditional Borders
Tom Anderson
Time: 15:15-16:00 Rm: Ran 2
「伝統の境界を超えるプロジェクト・ワーク」
- (5) Videotaping And Evaluating Student Conversation
Tom Kenny
Time:17:15-18:00 Rm: Nissay E
「学習者の会話のビデオ撮りと評価」
- (6) Facilitators Facilitate Learning
Johann Junge
Time:18:15-19:00 Rm: CS-705
「学習促進者による学習の促進」

November 3 (Sunday) 11月3日(日)

- (1) Communication Strategies: Student Awareness Training
Jim Kelim

Time:9:15-10:00 Rm: CS-703

「コミュニケーションストラテジー: 気づきの訓練」

(2) Using The "Inner Workbench" To Enrich Learning

Adrian Underhill

Time:9:15-11:00 Rm: Dahlia 1

「インナーワークベンチの利用: 学習を豊かに」

(3) Tell Me About It: Spoken Student-Teacher Journals

Reiko Furuya and Andrea Carlson

Time:10:15-11:00 Rm: CS-703

「教えてよ: 学生と教師の間の口頭日記の試み」

(4) Learner Strategy Training

David Nunan

Time:12:45-13:30

「学習者ストラテジーのトレーニング」

(5) Grammar And Learner Development

Tom Hutchinson

Time:12:45-14:30 Rm: Dahlia 1

「文法と学習者ディベロプメント」

(6) Truth, Relevance, Excitement: Can They Be Reconciled?

Alan Maley

Time:13:45-14:30 Rm: CS-703

「真理・関連性・高揚: 一緒にできるか?」

November 4 (Monday) 11月4日 (月)

(1) Students As Teachers: Crossing Cultural Comedies

Naoko Matsumoto

Time:9:15-10:00 Rm: Nissay A

「教師としての学生: 文化的喜劇を越えて」

(2) Timed Practice: The Two-minute Conversation

Tom Kenny and Mark Wright

Time:10:15-11:00 Rm:Nissay A

「制限時間つき練習: 2分間会話」

(3) The Independent Language Learner

David Nunan

Time:12:15-14:00 Rm: Dahlia 1

「自立した外国語学習者」

(4) Learner Dictionaries: From Computers To Classroom

Jim Ronald

Time:13:15-14:00 Rm: Nissay D

「学習辞書: コンピュータから教室へ」

(5) Asking Questions

Reuben Gerling

Time:14:15-15:00 Rm:CS-703

「質問する」

NOTE: All presentations are subject to changes in time, place and location. Some may be cancelled for various reasons. Please check your handbook and the Conference Daily for the latest Time, Day and Place.

注: 会場及び日時はあくまでも予定です。変更される場合もありますので、大会当日のお知らせ・案内等にご注意下さい。

7) Reporters of Hiroshima conference presentations wanted

広島大会での発表のリポーター募集

Why don't you write a report article of the presentation(s) you attend for *Learning Learning*? For more information, please contact either of the co-editors (addresses at the back of the issue).

あなたの聞いた発表の要旨を『学習の学習』で報告しませんか。ご協力いただける方は、編集係までご連絡ください。

(連絡先は最終ページにあります)

8) JALT 97 Annual Conference

JALT 97 年次国際大会

Next year's annual conference will be held in Hamamatsu. It isn't too early to start thinking about giving a presentation next year! If you are interested in giving a presentation or organizing a colloquium or roundtable and need any assistance or information for application, please contact Morio Hamada, programme co-chair (e-mail HCA01742@niftyserve.or.jp; phone/fax (h) 0427-27-5763;).

来年度の年次大会は浜松で開催される予定です。発表してみようと思っている方は、今から準備にとりかかっても早すぎることはないと思います。申込みにあたり、お手伝いできることがありましたら、プログラム係の浜田盛男までご連絡下さい。(e-mail HCA01742@niftyserve.or.jp; phone/fax (h) 0427-27-5763;)

Answer Key to Faculty Meeting Kanji Tasks

I. a. university b. school entrance c. entrance examination d. student e. teacher f. education g. educational materials h. committee meeting

II.A. 1) 教授/会議事/要録 2) 報告/及び/説明/事項

3) 審議/事項 4) 懇談/事項 5) 庶務/課

6) 研究/費 7) 入学/試験 8) 図書/館

B. (B1b) A6h C4e D3f E7a F8d G5c H2g

C. 1. c, f 2. a, h 3. d, g 4. b, e

Learner Development N-SIG AGM Agenda

学習者ディベロプメント研究部会1996年年次総会議事提案

This agenda is proposed by Izawa Hiroyuki and Andrew Barfield, joint recording secretaries 1996. It has been developed from the "Minutes of the Learner Development N-SIG Annual General Meeting, 1995" in the "Learner Development N-SIG End of Year Supplement 1995."

Looking back at that supplement as a reference point, we see one purpose of this annual general meeting as trying to help N-SIG members "how to do what to do" ... If we look at the goals and stated activities of the N-SIG, we see things such as:

1) N-SIG Goals

How "to provide a forum for exploration and dissemination of practical ideas connected with learner development" ; How "to promote the potential benefits of various kinds of learner development in the wider language teaching community in Japan" ; How "to provide a focus for empirical research in areas such as characterisation by typical learning styles, identification of effective learning strategies, etc., with a particular emphasis on the Japanese context How "to develop suggestions and opportunities for language-related self-improvement by teachers themselves."

2) N-SIG Activities:

How "to maintain a database for teachers and researchers interested in cooperating with one another"; How "to establish a bilingual newsletter devoted to the above concerns"; How "to field presenters for local JALT chapters, regional miniconferences, and the annual N-SIG conference" ; How "to submit proposals for colloquia/roundtables on learner development at the JALT International Conference and regional mini-conferences" ; How "to help members find avenues through which to publish their work" ; How "to network and cooperate with groups having similar interests."

But the question we have is how can people at the annual general meeting move beyond simply talking about this ? How can more people become creatively involved in achieving some of those goals and in carrying out some of those activities?

Because the N-SIG is non-hierarchical, we feel uneasy about recommending a fixed agenda in advance. However, we do recommend that everybody attending devote at least 20 minutes to brainstorming and free-writing on learner development topics that are of personal interest to them, so that these writings and ideas can then become a central part of the developmental process of the N-SIG over the next year through to JALT '97.

We are sorry we can't be more specific than that, but because the N-SIG has trust and mutual cooperation as two of its central guiding lights, we are happy to share our incomplete ideas with you. Indeed, we look forward to seeing you at the AGM where you can help these 'incomplete' ideas become 'more complete' through bilingual, creative interaction!

Best wishes,

Izawa Hiroyuki
Andrew Barfield

☆☆☆

この提案は『学習者ディベロプメント研究部会1995年末別冊』に掲載された1995年年次総会議事録に基づいております。その内容に鑑み、本年度年次総会の一つの目的を、会員諸氏の活動を促すべく、「何をいかに為すべきか」と捉える次第です。つまり、研究部会の目的と活動に関して下記のとおり提案致します。

目的：

どのように「学習者の成長に関する実践的なアイデアを探究し、広めるためのフォーラムを作る」のか；

どのように「特に日本を対象にした、典型的な学習スタイル、効果的な学習ストラテジーなどに関する実証的な研究に焦点を当てる」のか；

どのように「日本の言語教育コミュニティーに、学習者の成長がもたらす潜在的利益に対する理解を広める」のか；

どのように「教師自身の言語能力を改善する機会や、そのためのサジェスションを提供する」のか；

活動：

どのように「教師と研究者の相互協力を可能にするために、データベースを作成する」のか；

どのように「バイリンガルのニュースレターを発行する」の

Joint Recording Secretaries' Report 96

書記報告96

か；
どのように「JALT大会や支部のミニ・コンファランス、N-SIGコンファランスに発表者を送る」のか；
どのように「メンバーの研究成果の公刊を支持する」のか；
どのように「同様の目的を持ったほかのグループとネットワークを作り、協力する」のか。

しかしながら、会員諸氏がこれらを話し合うにとどまらず、「どのように」実践できるのかという問題が残ります。多くの会員諸氏が上記の目的や活動に主体的にそして創造的にかかわれるのでしょうか。当研究部会の構成は階級に基づくものではありませんから、私たち書記が上記の案を議事決定事項として提出するのをはばかります。唯、研究部会の将来に渡る発展の礎として、来たる年次総会においてわずかばかりの時間を当該事項に関する自由闊達な意見交換の場にさくのはいかがなものでしょうか。上記議事提案は具体性に欠けますが、当研究部会の信頼と相互協力の精神にのっとり、具体化への発展性を共有したいと考える次第です。日英両語での創造的な会員諸氏の触れ合いを通して、未完で具体性に欠ける思索が熟する機会を年次総会の方が与えることを期待しております。

書記：アンディ・バーフィールド
井沢広行

This is a process report that tries to capture the continuing evolution of the Learner Development way of doing things.

1) The treasurer, Yuko Naito, reports:

The balance as of 4 October is Y97,116. At the end of 1995, the balance was Y43,042, and the SIG owed a joint coordinator Y93,208. This year we got a one-time special grant of Y121,158 from JALT National to improve our finances as well as a regular grant of Y80,000 and membership dues of Y154,000. We also had miscellaneous revenues of Y10,528. As for expenses, we have paid back all the debt and spent Y186,427 on the newsletter production and distribution between January and June. Other types of expenses have amounted to Y31,977. As we are expecting more NLs, the balance at the end of 1996 may be in red again.

2) The joint coordinators, Aoki Naoko and Richard Smith, report the following actions:

- * Negotiated with JALT national that N-SIG receive about Y 120,000 needs fund.
- * Decided to discontinue L to L due to the financial and staffing problem.
- * Liaised with programme co-chairs concerning local mini-conferences, TE-LD joint action workshops, and JALT 96 presentations
- * Liaised with membership chair concerning membership survey
- * Appointed Jill Robbins as publicity co-chair
- * Kept publicising LD N-SIG outside JALT and establishing links with groups with similar interests
- * Set up a Web home page
- * Explored ways in which work involved in running the N-SIG can be deligated

3) The programme co-chair, Morio Hamada, reports the following actions :

- * February 25 co-sponsoring with JSL N-SIG Kanji colloquium for Tokyo JALT Spring Conference
- * May 18 co-sponsoring with TE N-SIG a participant-centered workshop at Meiji University
- * selecting the presentation to be sponsored by LD N-SIG for JALT 96 Conference

Help! Help! Help!

I am planning to write a research paper on Project Work (a case study of the PW I'm doing in my Communication Workshop class at Tokyo University of Foreign Studies) and I am looking for articles, books, etc. that are relevant to the topic. Any references or materials that anyone could give / loan to me would be appreciated. Thanks!

私は東京外国語大学で担当しているコミュニケーション・ワークショップで行っている、プロジェクトワークの事例について論文を書きたいと思っており、それに関する論文、書物などを探しています。参考資料、文献その他何でも、(貸して)くださる方がいたら、よろしく願います！

Tom Anderson
3-104 Midori no machi
1219-1 Hirato-cho, Totsuka-ku
Yokohama 244
Tel./fax (h) 045-825-3231

* organizing and applying for a roundtable (co-sponsored with TE N-SIG) and a colloquium (co-sponsored with JSL N-SIG) but in vain.

4) The other programme co-chair, Mary Scholl, reports the following actions:

On November 26, 1995 we had a LD get-together in my apartment in Hirakata. Josh Kurzweil presented for LD at the Kyoto Book Fair in January, and at Nagoya JALT chapter meeting in March.

5) The *Learning Learning* co-editors, Naoko Aoki and Richard Smith, report the following actions:

* LL 2/3 & 2/4 published with the funding from JALT national in early 96

* Put out two more issues of LL

* Involved assistant co-editors in the editorial process to ensure smooth transition to their full co-editorship

* Examining how quality of LL can be maintained while lessening the work load of future co-editors in consultation with current assistant co-editors

6) The LL assistant co-editor, Sumiko Taniguchi, reports the following actions:

* Involved in the editorial process of LL 3/1 and 3/2

* Discussed the role of co-editors in planning and publishing LL with current co-editors

7) The co-librarian, Sukero Ito, reports for his ex-co-librarian, Stewart Hartley:

* Had six journal reviews in *Learning Learning* with the help of Evelyn Sasamoto

8) The *Learner to Learner* co-editor and translation coordinator, Tomoko Ikeda, reports:

* Edited the last issue of L to L, 3/4. (with Richard Smith)

* Arranged translation for LL 2/3, 2/4 and 3/1.

* More translation volunteers on e-mail needed.

9) The newsletter printing and distribution, Hugh Nicoll, reports:

Started printing and taking care of the mailing of LL and LtoL newsletters in December of 95. The mailings went out in early January, February and May, LL issues 2/3, 2/4 and 3/1, respectively. I paid my student helpers 800 yen per hour. I have not been especially good at

filling requests for back order requests - probably I should have delegated the secretarial job to a student helper.

10) Retirement of Richard Smith as joint coordinator

Richard is retiring at the Hiroshima conference as joint coordinator.

11) Appointment of Hugh Nicoll as new joint coordinator

Hugh Nicoll will be taking over as the English co-coordinator of the N-SIG, but will be unable to attend the conference. His appointment, achieved through the joint efforts of Richard and Naoko, needs to be approved by N-SIG members at the Annual General Meeting in Hiroshima.

12) Evolving constitution

LD has an organic constitution, in constant renegotiation between the active members of the N-SIG, and based on joint cooperation and trust. Hugh's appointment shows how the constitution is evolving with regard to the coordination of the N-SIG. It shows also that the N-SIG committee is developing around the open initiatives of the co-coordinators.

Naoko comments:

So the issue would be whether we think joint coordinators are special positions. I'd rather think it is. I feel future joint coordinators should be involved in organising a committee they'll be chairing. This means we have to announce current joint coordinator(s) retirement, AND their replacement(s), though still to be approved by the AGM, before a conference.

Hugh comments:

I came on board so to speak - having met Naoko and Richard in Hong Kong - by agreeing to write a short article and then by agreeing to handle the printing and mailing/distribution work for *Learning Learning* and *Learner to Learner*.

I wondered if by agreeing to Richard and Naoko's request to volunteer as Richard's replacement as co-chair, I was putting the N-SIG in difficulty vis a vis the policy and procedures of filling leadership roles for the group. This is particularly touchy since I will not be attending the National Conference in Hiroshima this year. If I were in attendance my role could be openly

approved/discussed by the membership at large, and be a part of general discussions, as necessary, on the nature and structure of leadership in the N-SIG.

Theoretically, this should be possible for all members at any time, (from any place) for, as far as I know anyway, there are no systems designed to exclude people from participation in the group, and what we are all about is learning/being leadership/leaders by participation, isn't it?

Richard comments:

Though I wrote in an earlier message (about the next LL) that our precedent has been *not* to have what I called "bureaucratic" info. in LL (i.e. t put this in a separate supplement), recent discussion has been so invigorating that I've been thinking perhaps it should be included in some way in LL itself (i.e. LL less as a closed "product", more allowing light into (and so involving more people in) the new processes we're trying to develop for making things / reaching decisions / learning as we work.

Hugh comments:

Getting fuzzier and fuzzier ... but, my overall impression is that LD has evolved with an informal leadership structure of cooperating individuals who make the effort to accomplish particular tasks - writing, translating, editing, printing and distributing newsletters, for instance, or hosting meetings and mini-conferences that allow the principles and practices of learner autonomy to be discussed and developed.

13) Other committee positions for 97

At the time of writing, the LD committee is actively discussing how best to advertise different committee posts and trying to find out who would be interested in taking a particular responsibility.

14) Other points

Having a bilingual policy is not the same as making it work in action (in face-to-face discussion, over e-mail, in publications, in meetings). Recent discussions over e-mail have shown how English tends to dominate discussions, and how this indirectly disempowers Japanese committee members from taking an equal part in the evolving decisions and initiatives.

Opening the newsletter to greater discussion of process is one way to help create a more effective bilingual way of active and anarchic participation in the N-SIG.

Joint Recording Secretary 96
Andrew Barfield

☆☆☆

学習者ディベロプメント研究部会は意志決定のしかたなどについての規則はもっていません。私たちは、活動を続ける中で、つねによりよいやり方を探っていきたいと考えます。このレポートは、この一年、私たちが何をどのようにやってきたかの報告です。

1) 会計系の報告

95年末の預金残高は43,042円で、経費の未払戻分が93,208円ありました。今年はJALT Nationalからの特別援助金121,158円、活動費80,000円、会費154,000円の収入があり、その他の収入が10,528円ありました。支出は、前年の経費払戻93,208円、ニュースレター関係経費186,427円、その他が31,977円で、10月4日現在の預金残高は97,116円です。年内にニュースレターの発行予定があるため、12月末の収支は、また赤字になるかもしれません。

2) ジョイント・コーディネーターの報告

- * JALT Nationalと特別援助金の交渉をした。
- * 経済的および人手の問題で *Leamer to Leamer* を廃刊とした。
- * プログラム係と協力して、各種催しでの発表を企画した。
- * メンバーシップ係と協力して、メンバーへのアンケート調査を行った。
- * ジル・ロビンズに広報係を依頼した。
- * JALT外部でLD N-SIGの広報活動を行い、同様のグループとの交流を進めた。
- * WWWのホームページを作った。
- * 研究部会運営の仕事のよりよい分担方法を探った。

3) プログラム系の報告

- * 95年11月大阪で第4回めの学習者ディベロプメントの集いを開いた。
- * 96年1月と3月に、それぞれ京都ブック・フェア、名古屋支部例会でのジョシュア・クルツワイルの発表をアレンジした。
- * 96年2月の東京春季ミニコンフェランスで漢字学習についてのコロキアムを組織した。
- * 96年5月に教師教育研究部会と共同で、参加者中心のアクション・ワークショップを企画した。
- * JALT 96のための後援発表者を選考した。
- * JALT 96にコロキアムとラウンドテーブルの申込をしたが、不採用となった。

4) 『学習の学習』編集係の報告

* JALT Nationalの特別援助金で、第2巻3号と4号を96年冬に発行した。

* さらに第3巻1号を5月に発行した。

* 編集係アシスタントに編集の作業に参加してもらい、円滑な引き継ぎを目指した。

* 本誌の内容的質を維持しつつ、編集係の負担を軽減する方法を編集係アシスタントと相談しながら模索した。

5) 『学習の学習』編集係アシスタントの報告

* 第3巻1号および2号の編集に参加した。

* 編集係の役割について、現編集係と協議した。

6) 司書の報告

* 『学習の学習』に6つの雑誌記事紹介を準備した。

7) *Learner to Learner*編集係および翻訳コーディネーターの報告

* *Learner to Learner*最終号 (3/4) をリチャード・スミスと共に編集。

* 『学習の学習』の2/3, 3/1, 3/2号の翻訳を手配。

* 電子メールが使える翻訳ボランティアがもっと必要。

8) ニュースレター印刷、発送係の報告

『学習の学習』と*Learner to Learner*の印刷を95年12月に開始し、これまでに3号の印刷と発送を行った。学生のアルバイトには時給800円を支払った。バック・ナンバーの購入申込にはあまり迅速に対応できなかった。こうした事務的な仕事は学生アルバイトに任せたいほうがよかったかもしれない。

9) リチャード・スミスは、JALT大会をもって、ジョイント・コーディネーターの職を退く。

10) ジョイント・コーディネーターの後任をヒュー・ニコルに依頼する。

ヒュー・ニコルは、リチャード・スミスと青木直子の依頼に応じて、来年度のジョイント・コーディネーターを引き受けることに同意したが、JALT大会には参加できない。JALT大会での年次総会で、ヒュー・ニコルへの依頼は正式に承認されなければならない。

11) 定款の進化

当研究部会の定款は有機的なもので、協力と信頼を原則に、活動する会員たちの間での交渉を通じて、つねに見直しがされている。ヒューへの依頼の過程は、当研究部会の運営に関して、定款がどのように進化したかを示している。また、運営委員会がコーディネーターの開かれたイニシアティブを中心に成長していることも示している。

直子のコメント：

問題は、ジョイント・コーディネーターは特別なポジションかどうかということだと思う。そして、私はそう思う。なぜなら、来年のジョイント・コーディネーターは来年の運営委員会を組織する過程に参加するべきだと思うし、そのためには、ジョイント・コーディネーターがやめるときには、そのことと、後任の候補はだれかということをお大会前にみんなに知らせる必要があるから。もちろん、後任は年次総会で正式に承認する必要があるけれど。

ヒューのコメント：

ぼくがこの研究部会にかかわるようになったのは、香港で直子とリチャードに会って、短い記事を書くことを引き受けたことがきっかけだった。それからニュースレターの印刷と発送を引き受けることになって、で、こうなった。

リチャードと直子の頼みを引き受けたことで、コーディネーターを決める原則と手続きに関して、問題を作り出してしまったのかと思った。特に、ぼくが広島にいけないということは、ことを複雑にするかもしれない。ぼくがその場にいれば、メンバー全体でぼくの役割について、公の場で話し合いをし、承認してもらうことができるし、この部会のリーダーシップの性質と構造について、一般的な話し合いにぼくも参加できるけれど、それができないから。

理論的には、いつでも（どこにいても）メンバー全員にとつてコーディネーターになることが可能でなくてはいけない。ぼくの知る限り、この研究部会は、だれかが運営に参加することを妨げるようなシステムにはなっていないはずだから。それに、ぼくたちは結局、参加することによって、リーダーシップについて学び、実践していることになってるんだろ？

リチャードのコメント：

前に『学習の学習』には「完了主義的」情報は載せないのが先例だといったけれど、最近の活気ある議論を見て考えが変わった。このことは何らかの形で『学習の学習』に載せるべきかもしれない。つまり閉じられた産物としてのニュースレターではなくて、ぼくたちがものを作り、意志決定をし、仕事をしながら学ぶために作り出そうとしている新しいプロセスにもっと光を当てて、もっと多くの人に参加してもらえようにしたいんじゃないかな。

ヒューのコメント：

ますますファジーになってきた... でも、ぼくの全体的印象としては、この研究部会は、たとえば、ニュースレターの記事を書き、翻訳し、編集し、印刷し、発送する、あるいは、学習者の自律の原則と実践について話し合うためのミーティングやミニ・コンフェレンスを企画するという特定のタスクの遂行にそれぞれ努力している個人が協力しあう中で、形式ばらないリーダーシップが生まれ、それが、このグループを育ててきたということだと思う。

12) 97年の運営委員会のその他のポジション

このレポートを書いている時点では、運営委員会は、どのようにして、あいているポストについてメンバーに広報し、だれがどの責任を引き受けてくれそうかをどうやって知るのがいちばんいいか、議論している。

13) その他

バイリンガルの原則を持つということ、話し合いやe-mailや出版物やミーティングという行動の中でそれを機能させるということは同じではない。最近のe-mailでの議論では、われわれの議論が英語が主になっていて、それが、間接的に、運営委員会の日本語話者メンバーが対等の立場で議論と意志決定に参加するのを妨げているということが問題になっている。

ニュースレターをプロセスについての議論の場にするには、この研究部に積極的に、アナーキーに参加することを可能にするための、より有効なバイリンガルな方法を作り出す一つの手段である。

96年書記 アンディ・バーフィールド

AUTONOMY 2000 : ANNOUNCEMENT OF A CONFERENCE November 20-22, 1996

Autonomy 2000 - The Development of Learning Independence in Language Learning
Venue : King Mongkut's Institute of Technology, Thonburi, Bangkok, Thailand
Plenary speakers: Philip Riley, Anita Wenden, William Littlewood, Leslie Dickinson, Gill Sturtridge, Nantha Gohwong
Conference fee : \$100
Further details from : Ms. Metta Limponsa, School of Liberal Arts, King Mongkut's Institute of Technology Thonburi, Bangmod, Rasburana, Bangkok 10140, Thailand. Tel.:+(662) 4270039 Ext. 5309; Fax.: +(662) 4278050; E-mail: <ilesnson@cc.kmit.ac.th>

コンフェレンスのお知らせ

AUTONOMY 2000 - 言語学習における自立の育成

期間 : 1996年11月20-22日

会場 : バンコク (タイ) キング・モンクット工科大学

講演者 : フィリップ・ライリー、アニタ・ウェンデン、ウィリアム・リトルウッド、レスリー・ディキンソン、ジル・スタートリッジ、ナンタ・ゴウォン

参加費 : 100ドル

問い合わせ : 英語版を参照してください。

Thank you!

The Learner Development N-SIG wishes to express their deepest appreciation to the outgoing committee members, Aleda Krause, Mary Scholl, Richard Smith, Stewart Hartley, Tomoko Ikeda, and Yuko Naito, for their outstanding work to make the SIG a reality. Our thanks are also to Hugh Nicoll for his everlasting commitment.

今年限りで学習者ディベロプメント研究部会の運営委員会を去るアリーダ・クラウスさん、メアリ・ショールさん、リチャード・スミスさん、ステュアート・ハートレーさん、池田智子さん、内藤裕子さんに、心からお礼を申し上げます。私たちの理想や希望やアイデアを形にするために、皆さんの果たした役割は、とてもとても大きかったです。そして、ヒュー・ニコルさん、大変な時にいつも助けてくれてありがとうございます！

Learning Learning in the future...

これからの『学習の学習』

Sumiko Taniguchi and Steve Cornwell will be *Learning Learning* co-editors starting with the next issue. Send all contributions to:

Sumiko Taniguchi
5-29-15 Kugayama,
Suginami-ku 168 Tokyo
Phone (h) 03-3333-3970; Fax (h) 03-3333-7760
E-mail JAC00523@niftyserve.or.jp

Steve Cornwell
Gran Pier Yoshida 206
3-6-1 Mizuhai,
Higashi Osaka 578
Phone (h) 0729-61-4182; Fax (w) 06-761-9373
E-mail stevec@gol.com

次号から谷口すみ子とスティーブ・コーンウェルが『学習の学習』の編集係です。記事、お知らせ等の送り先は：

168 東京都杉並区久我山5-29-15 谷口すみ子

578 東大阪市水走3-6-1 グラン・ピア吉田206
スティーブ・コーンウェル

(二人の電話、ファックスとe-mailは英語版をみてください)